慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	コア・ナレッジの実践 : アメリカ合衆国におけるコア・ナレッジ学校の事例研究
Sub Title	
Author	翟, 高燕(Je, Koen)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2012
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.74 (2012.) ,p.130- 134
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成23年度博士課程学生研究支援プログラム研究成果報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000074-0130

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

た場合，システマティックモードの参加者はヒューリスティックモードの参加者に比べて有意に有罪判断が少なかったことから，裁判での判断方法の知識がなくても，システマティックモード状態で裁判を視聴した場合，論理的・分析的に情報処理を行い，合理的な判断を行えることが示唆された。また，ヒューリスティックモードの状態では，説示の効果が表れた。このことより，説示を聞く際にはヒューリスティックモードであったにも関わらず，説示が提示されたことにより，裁判での判断方法についての知識を獲得し，後に提示された裁判の内容・情報をシステマティックに処理することが可能になることが示唆された。総合すると，説示による知識または認知課題によるマインドセットのいずれかの方法で，情報処理モードがシステマティックに操作された場合，後に提示される情報をシステマティックに処理することが可能であると考察される。

ネガティブ感情については，システマティックモードよりもヒューリスティックモード状態の方が感情の喚起が多かった。この結果より，システマティックモードで情報処理を行うことにより，感情の喚起が軽減されることが示唆された。これは，裁判中に提示される感情を喚起する情報に対処する方法の一つといえよう。しかしながら，実際場面で，裁判が始まる前に裁判員に認知課題を与えてマインドセットの操作をすることは適当ではない。また，本研究で用いた説示は主要なもののみであり，実際の裁判ではもっと多くの説示が与えられる可能性が考えられる。その場合，与えられる説示を理解するためにも，事前にシステマティックモードをセットする必要性が考えられる。したがって，今後は，実際場面でも応用できるマインドセット操作の方法を探っていきたい。

引用文献

Bright, D. A., & Goodman-Delahunty, J. (2006). Gruesome evidence and emotion: Anger, blame, and jury decision-making. *Law and Human Behavior*, 30, 183–202.

Chen, S., & Chaiken, S. (1999). The heuristic-systematic model in its broader context. In S. Chaiken & Y. Trop (Eds.), *Dual-process theories in social psychology* (pp. 73–96). New York: Guilford Press.

Epstein, S. (1994). Integration of the cognitive and the psychodynamic unconscious. *American Psychologist*, 49(8), 709–724.

Gollwitzer, P. M., Heckhausen, H. & Steller, B. (1990). Deliberative and implemental mind-sets: Cognitive tuning toward congruous thoughts and information. *Journal of Personality and Social Psychology*, 59, 1119–1127.

コア・ナレッジの実践

――アメリカ合衆国におけるコア・ナレッジ学校の事例研究――

翟　　高　燕

本研究の目的

1980年代のアメリカ合衆国において，E.D. ハーシュ，Jr.（E. D. Hirsch, Jr.）はコア・ナレッジ（Core Knowledge：以下CKと表記する）の概念を定義した。ハーシュは，この社会が貧困層の子どもの知識へのアクセスを拒否することにより，彼らが手伝われないことを認識した。当時CKの中身については長年の不一致がある。この不一致が存在している主な理由の一つは，すべての国家，地域，集団及び学

校において何の，誰の知識がオフィシャルだと宣言されるべきか，延々と激しい教育的議論があるからである[1)]。

理論的な議論に伴い，実践的にCKが運用されつつある。そのため本論はCKの実践運用，すなわちコア・ナレッジ財団（Core Knowledge Foundation：以下CKFと表記する）と，入学前児童から8年生までのコア・ナレッジ・スクールズ（Core Knowledge Schools：以下CKSsと表記する）を対象とし，コロラド州（Colorado CO）での事例研究を進める。これはコロラド州におけるCKSsのコア・ナレッジ・シーケンス（Core Knowledge Sequence：以下CKSと表記する）の実践運用に関しての数少ない報告の一つである。

本論にて，主に明らかにしたいのは三つの課題である。第一，CKは優位と非優位生徒の双方に有益であるか。第二，CKは公平（fairnes）と卓越性（excellence）を同時に実現できるのか。第三，CKSsにおける学業成績は比較学校より優れているのかという研究課題から，CKSを基礎とする成績データを参考にし，量的部分からCKSsにおける学業成績の変化と他校との比較を見る。

以上の研究問題から，以下のような順番で考察を行う。まず，ハーシュによる文化的リテラシー論という理念上の公平と卓越性，またCKFによる卓越性と公平の目標設定を整理する。そして，マイノリティ生徒多数のCKSsと一般学校における生徒のコロラド州生徒評価プログラム（Colorado State Student Assessment：以下CSAPと表記する）成績を比較し，マイノリティ生徒の学校におけるCK運用の卓越性と公平を明らかにする。さらに，マイノリティ生徒多数の一般学校とCKSsの比較により，CK運用に含まれた卓越性と公平をより一層検証する。このような量的な検証を行ったうえで，教員たちの質的な検証に基づき，公平と卓越性が質的にどのように反映されているかを研究する。以上の検証により，最終的にハーシュの文化的リテラシーが理念的な卓越性と公平を強調しているだけでなく，実践的にも検証されていることをまとめる。この事が，これからの学校運営に有益であることを期待する。

本研究の内容

1. 理念上の卓越性と公平

1980年代のアメリカ合衆国における教育問題を解決するため，ハーシュは1986年に非利益集団としてのCKFを設立した[2)]。学校にとって，この財団はハーシュのCK理念から，生徒たちの学業ギャップを解消するために，学年ごとに系統化されたCKSで，一貫した計画を提供する機関である。実際，このCKは対象によって機能が異なる。学校にとって，CKは州の標準を満たし，より有効に機能するチームワーク及び学校全体に焦点を当て，推進することに有益である。学区にとって，CKは生徒間のギャップを縮小し，高校で成功できるような強い知識基盤を築くことに役に立つ。さらに，多様な学校がすべての生徒に質の高い学習を提供するため，知識と経験に焦点を与える[3)]。

CKは文学・読み・書き・歴史・地理・芸術・音楽・数学と科学における一系列の知識とスキルである[4)]。この知識の原理は知識による知識の蓄積である。この知識の蓄積により，我々の読解力が高められ，問題解決能力と批判的思考力の養成が実現できる。その上，我々の知識の深さと広さでより高い成績まで達する[5)]。

現在実施されているCKSはすべての児童が知っておくべき基本的な知識の内容とスキルを教え，学級と学年，年齢と対応する一貫したシーケンスのことである。CKFは主にすべての子どもに教育にお

ける卓越性と公平の使命を主張し，CKSsの運用を実施する。この卓越性を実現するには，より高度な公平性とより高い水準のリテラシー，学校が一貫し，蓄積したコア・カリキュラムを必要としている。このカリキュラムは，すべての主題背景を生徒に据え，言語，背景知識と読解力の強いかかわりによって構築された。さらに，それは言語アーツの有効利用により，生徒たちに概念と語彙を精通させる機能を持つ[6)]。

2. 量的データから見る実践運用における卓越性と公平

CKFによると，CKSsが3種類に分類されている。それらは，友好CK学校（Friends of Core Knowledge Schools），正式CK学校（Core Knowledge Official Schools）と訪問CK学校（Core Knowledge Visitation Site）である。これらの学校は以下のような目標を実現すべきである。CKSに含まれたすべての主題を教え，カリキュラムのシーケンス・レベルに沿い，できるだけすべての生徒に州の目標に見合うように主題を変え，CKの運用実践を行う[7)]。

友好CK学校はCKを実行し始めた学校であり，学年ごとに多様な主題に関するCKを実行する。CKFのサイトで常に情報更新する学校である。正式CK学校はCKSを最低でも80%実行し，100%の実行目標を持つ学校である。CKFの専門的な設計によって運用され，認可されたCK顧問の調査を受けなければならない。訪問CK学校は完全CKFの指導と基準によって授業展開する学校であり，CKSを100%運用し，CKSsになりたい学校の訪問を受け入れなければならない義務がある[8)]。

本論はコロラド州における第3学年から第10学年生まで注目し，CKSsと非CKSs，白人多数のCKSsと白人少数のCKSsの二種類に分け，11校の学校を対象にして量的，質的データを整理する。整理にあたる量的なデータはコロラド州におけるCSAPである。このCSAPは1998年に頒布され，1998年度から1999年度までの学年において，第3学年のリテラシー，4年生の読み・書きと7年生の読み・書きを含む内容が州の評価内容として扱われている。さらに，このCSAPの成績評価は四つのレベルに分けられている。3年生の読み成績は，優（advanced），良（proficient），可（partially proficient）と不可（unsatisfactory）の四つのレベルである[9)]。本論で取り扱っている比較基準データは良以上の生徒成績である。

研究対象の学校はCKSsと非CKSs，白人人種多数と非白人多数の学校により構成されている。さらに，非CKSsの非白人多数の学校のCKを実験することにより，卓越性及び公平におけるCKの役割をより明らかにする。具体的に研究対象の学校をCKSsと非CKSsに分類し，それぞれの学校における少数民族のCSAP成績を比較する。この成績を比較することにより，実際各学校にて運用されているカリキュラムがマジョリティだけでなく，マイノリティの生徒の卓越性と公平の実現にどれほど効果があるのかを検証する。

さらに，非白人の割合の一番高いセザル・チャペス学校を3，4，5学年のCKSsの代表として，その学区全体マイノリティ人種のCSAP成績との比較をサンプルとして扱う。結果として，CKSsにおけるマイノリティの読み・書き・数学の成績は区全体の成績より高く，推測としてそれはその背後にあるCKとの関連性がある。セサル・チャペス学校におけるヒスパニックの割合は75%であるにもかかわらず，全体のマイノリティとしてのヒスパニックは50%以上が良の成績を持ち，区全体の成績より良い。単に成績が優れていることから，ヒスパニック生徒が社会で他のマジョリティと競争する機会が与えられ，平等的に生活する権利も与えられる。この意味では，3，4，5年生段階において，CKは生徒の卓

越性と公平の実現に有用である。

9，10学年におけるCKの作用を見るには，ヒスパニックと白人半分ずつのビナクルCK高校と黒人，ヒスパニックとハワイ人が多く占めるモントベロ高校との成績比較の必要が生じてくる。比較した結果によれば，ビナクル高校はCK高校として，CKSを使用している。その結果として，全体的に2007年から2011年まで，ビナクル高校の成績がモントベロ高校より高いことが分かった。さらに，ビナクル高校における読み，書きが低下している傾向がみられる。対照的に，科学と数学は上昇している。現段階でCKが活用されているビナクル高校はCKを運用することにより，マイノリティとして生徒が良を取る割合が高いことから，CKはマジョリティではなく，マイノリティの卓越性と公平を実現する上で重要な役割を果たした。

そのうえ，アンケート調査で34人の教員にCKについて質問した。33人の協力を得て，回収率は96.9%である。これらの教員の大部分は白人教員で，女性教員である。主に8個の質問を出して，強力賛成，賛成，中立，反対，強力反対という5つの指標を立てて検証した。CKは学校教育をより有効にする共通知識；CKは学校教育をより平等，民主的にする共通知識；CKは我々の学校と国家における協力と安定性を手助けする共通知識；学校が州基準を満たすと越えるためにCKは役に立つ；CKは生徒能力における学習ギャップを減少する；CKは学校がすべての生徒に良質の学習を提供できる；CKは学校と生活における交流に共通基盤を提供する；CKは学習成績のギャップを縮小する上で有用である。これらの質問の2，4，5，6，8の賛成率は77.4%，87.1%，77.5%，80.6%，83.8%である。このように，教員たちは生徒の公平と卓越の目標を実現するにあたり，CKの有用性を認めている。

本研究の結果

学校と生徒にとって，CKは役に立つのか。さらに，CKは公平と卓越性の実現にあたり，どのような役割を果たしたか。これが本稿の冒頭の問いに対して直接述べたものである。その一端を探るため，コロラド州のCSAPデータを使用し，CKと学業成績，主に読み・書き・数学・科学成績との関係を探索的に分析してきた。さらに，2つのCK学校の教員を対象に，CKの効果について調査をした。その結果，次の3点が明らかになった。

第1に，3学年から10学年までのマイノリティ多数のCKSsと非CKSsの成績を比較することにより，CKSsにおける成績が高いことから，CKの作用が明確になった。さらに，マイノリティ学校における成績を考察することにより，マジョリティではなく，マイノリティの優秀度から，CKの活用による公平が分かった。第3に，教員の質的調査により，認識段階における公平と卓越性を実現する上で，CKの役割が浸透されていることも判明した。

謝辞

本事例研究は慶應義塾大学博士課程学生研究支援プログラム(研究科推薦枠)の支援により行われたものである。さらに指導教授である松浦良充先生の配慮により，今回の事例調査研究を終えることができた。この場を借りて，厚く御礼を申し上げたい。

そして，アメリカ合衆国のコロラド州にいるドウェイン・シュミッツ（Dwayne Schmitz），マーク・ウェルトハイマー（Mark Wertheimer），ジョー・キュデミ（Joe Cuddemi），ギンガ・ノートン（Ginger Norton）とトレーシー・スタンフォード（Tracy Stanford）及び各学校の生徒，教員たちの協力に感謝

の意を表したい。

註

1) Williams, R. (1989). Resources of Hope: Culture, Democracy, Socialism, London ; New York : Verso.
2) Hirsch, E. D., Jr. (Ed.).(1998).What Your Second Grader Needs to Know: Fundamentals of a Good Second-Grade Education, Core Knowledge Foundation, Charlottesville, VA, xvii.
3) 〈May 16th 2012, http://www.coreknowledge.org/benefits-of-core-knowledge.〉
4) Hirsch, E. D., Jr. (Ed.). (1998). What Your Second Grader Needs to Know: Fundamentals of a Good Second-Grade Education, xv.
5) Core Knowledge Foundation. (2011). Core Implementation Practices: A guide to Effective Implementation of Core Knowledge, Core Knowledge Foundation, Charlottesville, VA, 9.
6) Ibid.
7) Ibid, 33.
8) Ibid, 33–34.
9) Colorado Department of Education. (1999). Colorado Student Assessment Program: CSAP UPDATE. No. 1–5.